

時代の変化とともに

中原 宣子*

昨今の科学技術の進歩は目を見張るものがあり、油断すると置いていかれそうである。自分が生活するなかで少し遅れをとる程度ならよいが、発達の勢いは増しており倫理的な検討が追いついていないのではと危惧することもある。最近ではAI（人工知能）を利用し脳の思考を翻訳する装置をテキサス大学の研究チームが開発しているというニュースを聞いた。そういえば言葉を発しなくても目の動きだけで意思を言語化する装置はすでに利用されている。身体の不自由を抱える人にとっては朗報であり、このような技術が人々の幸福になるために適切に利用されるのは歓迎である。

一方で、科学技術がこのように進歩していても、人の心は今も昔も変わらないようである。喜びや幸福感、感謝や穏やかな気持ちで満たされているのならよいが、孤独感やつらさ、憎しみ、嫉妬、そして身勝手な欲望が世界中に溢れている。どのように処理しプラスに変えるかはその人の倫理感をはじめとする教養や理性が鍵を握る。対立の場合、大きな争いに発展し何万人もの命を失うこともある。価値観の差異を埋めるためには日頃から相手を理解するコミュニケーションが重要である。直接的な会話が大切だと思うが、世間ではスマートフォンやインターネットの影響で家族間の会話は減り、職場ではハラスメントに気を使い、自ずと会話も単調になっているのが現代社会の傾向である。

感性を大切にしたい看護はそういうわけにはいかない。

* 浅香山病院透析センター

とくに慢性疾患である透析患者へは身体と心の両面に目を向けてケアが行われる。40 年前に初めて出会った患者たちは明るく、よくしゃべってくれていたが貧血が強く毒素も十分抜けきらず肌は土色をしていた。合併症予防が大切で、安定した透析に加え患者自身のセルフケアも不可欠である。うまくできるように励ましながら患者に合わせて伝えるのは透析看護の大きな役割の一つであった。また、専門職者として変化する透析医療の知識吸収も怠ることはできない。当時から透析室の書棚にあった『臨牀透析』はテキスト風の文献や難しそうな論文とは異なり、臨床における身近な課題がタイムリーでわかりやすく取り上げられている貴重な情報源だった。患者の気持ちを受け止めながら自立を促し、自らの知識も豊かにしケアの方向を定めていく。そうやって試行錯誤しながら今日がある。

時は経ち、70 歳を超えている患者が大半となり、独居や高齢者夫婦だけではなく、施設に入所中の患者も増えている。家族関係も変化しており、連絡を取りにくいケースもみられる。自己管理教育どころではなくなり戸惑ったこともあったが、高齢患者の求める“何か”を探るのも楽しいものである。柔軟な対応ができるのは人間の感性に基づいている。AI の脅威を恐れず、各々が人としての感性に磨きをかけて患者と向き合いながら歩いていく社会が賢明な選択をすることを期待したい。